

## 「本学神社をつくった人たちの明治

～伊那谷に夜明けは来たか、世直しの思想を追って～

高森町歴史民俗資料館長 松上清志

### はじめに

これが本学神社です。ついこの間本学神社へ行ったんですが、この写真と違う所があります。ここに穴が開いているんですが見えますか？ここから入って賽銭を盗まれてしまうと、総代長さんに言ったら、きれいに張り直してもらったようで、2、3日前に行ったら賽銭泥棒が入れないようにしてありました。

この建物は昭和3年に出来た建物で、最初の本学神社ではありません。明治になる前に出来たのが最初の本学神社ですが、この本学神社を造ったということはすごいエネルギーが必要だったと思います。その当時、皆で力を合わせてやらなければ出来なかったことではないかなあとと思いますが、私のテーマはその人達のエネルギーが明治の世の中になった時に一体どうなったのか、果して皆はどう生きたのかということにテーマにしました。山吹の人を中心にして学習会などを通じて本学神社を造っていくわけですが、そのエネルギーが一体どうなったかということです。

ここに島崎藤村の『夜明け前』の本があります。四部構成4冊になって前半が明治以前、後半が明治になってからということで、藤村自身が、木曾谷に「夜明けは来たか」というテーマで考えて作った作品ではなかったか、と思います。今、中津川の中山道歴史資料館では『中津川に夜明けは来たか』というテーマで特別展をやっています。ここでは戊辰戦争を中心に明治の初期の段階のところだけをテーマにして、夜明けは来たかということでやっています。私も伊那谷に夜明けは来たかというテーマで考えてみたいと思います。「夜明けは来たか」ということになると、やはり世直しということ、当時の人達も今とは少し違うだろうけれども、何らかの形で世直しということを考えながら活動したのではないかと思うので「世直しの思想を追って～」というサブテーマをつけてみました。



### 1、本学神社をつくった人たちの世直しの思想

最初、本学神社とは言わずに、最初は平田篤胤が名付けて本学霊社と言ったようです。途中で本学神社に変わっているんです。本学神社の様子が絵に有りまして、これは国立歴史民俗博物館のほうで所蔵しておりましたので送っていただきました。そうするとこんな風な絵になります。

今の條山の下には中央道が走っていきまして、山道を登って行きますと鳥居が有ります。そして鳥居から上がっていくと、昔はここに垣根、玉垣って言いますね、神社の玉垣に囲まれた中に遠くで見えませんが、本殿、神殿が二つあります。雨ざらしの神殿です。これが昔の本学神社。この絵は恵那の神主である宮原という人が明治4年にこの地へ旅行して描いたもので、本学神社が出来て5年ばかりたった時の様子ですので確かだと思えます。こんなふうになつた本殿が有ることとはどういう



ことかといいますと、大きな本殿には<sup>しゅうし</sup>の学者の使っていた物を貰

ってきて、<sup>みたましろ</sup>御霊代として入れてあるわけです。その隣は何かというと、平田篤胤が非常に大切にしている、特別に山吹

へくれた陽石を入れた、<sup>だいようせき</sup>大陽石といわれた男根に似た万物の基になると平田篤胤が考えたそういう物が入れました。

四大人の物と一緒に入れてはいけないと言われたので、別の神殿を作ってここへ大陽石が入れてあると思われま

す。こういう本学神社を山吹の人達が中心になって造ったわけです。慶応3年の本学神社の創建祭の参列者の名簿が国立博物館で作ったものですが、それがこの資料館に来ております。それを見ますと小野からも来ていますし、多勢子の娘が嫁って行った中津川からも来ています。山吹が圧倒的に多いわけです。山吹でも今日、話題にしております今村松太郎、今村信行（のぶみち）、片桐千里という人達も参列をしています。

ところが座光寺家の殿様の息子の益太郎はここに参列しておりません。「殿様の息子」という立場上参列出来なかったのかなあとと思います。それからあと座光寺の北原稲雄・今村豊三郎の兄弟が参加していたり、伴野村の多勢子は勿論、多勢子の孫の松尾千振も参列しております。全部で118人参加しているわけですが、創建祭の様子が、「夜明け前」の本の中に出てきます。

その夜明け前の主人公である青山半蔵は都合で来れなかったのが、馬籠の宿で残っているわけです。ちょっと読んでみます。

《その日の式は山吹村の方で夜の丑の刻に行はれるといふ。伊那の谷から中津川辺へかけての主な平田門人は、殆んど全部、それにまだ入門しないまでも篤胤の信仰者として聞えた熱心な人達が古式の祭典に参列するという。半蔵は自分一人その仲間に泄れたことを思い、袴をつけたままの改まった心持で、山吹村追分の御仮屋から條山神社の本殿に遷されるという四大人の御霊代を想像し、それらを奉げて行く人の誰と誰とであるべきかを想像した》

と書いてあります。今の上県道の所に山田さんというお宅があるんですが、その向かいに高橋さんというお宅がありまして、そこで支度をして松明行列をつくって夜中の2時に上がって行って魂を入れたという本学神社の創建祭です。

慶応3年、明治になる直前です。問題はこういうふうにしてつくった人達の中に世直しの思想というのがあったんだらうか？世の中をこういう風に変えていこうという思想があったかどうかをみてみたいなあと思っていたんです。たまたま本学神社の創建に中心的な役割をはたして、創立の前の年、慶応二年に急逝してしまう座光寺家の家老である片桐春一（春一郎）という人がいますが、その人が書いた物がありまして、その中の物を見れば、ある程度世直しの思想がわかるのではないかと探してみました。資料館に片桐家の文書は寄託されているのですが、その中には見つかりません。春一が書いた「天下無窮泰平基録」という文書があって、その中に春一の思想が出ているといわれているんですが、今探しても本物は見つからないんです。

ところが『伊那』の1979年5、6、8月号に岸野俊彦氏がそれについて書いてあるので、それを参考にして見てみたいと思います。お手元の資料細かいですが、見てください。

3回にわたって書いてありますが、皆さんにお渡ししたのは第1回目に書いたものです。2回目は片桐寿という人が全文書き写してありますのでそれが出ています。第3回目はそれについての検討がなされているんですが、全文というとなかなか難しいので、ここに市村威人さんのメモが出ていますので、そのメモが解り易いと思いますのでここに出してあります。

### 『天下無窮泰平基録』にみる世直しの思想

資料①ですが、市村威人氏のメモについてとあります。全部見ていると時間がありませんので途中を拾ってみたいと思います。右側の下の段、これが書かれたのはいつだということが書いてあります。

「年代ハ記サレテオラザルモコレニ用ヒシ紙片ハ反古ヲ用ヒアリ裏面ニ書籍調集ヲ催サントシタ草稿ノアルヲ見ルニ而シテ此書籍調集ガ慶応元年デアルカラコレモ其頃ノモノト考ヘラレル」慶応元年に片桐春一が書いたのではないかと予想しています。

左側の上の段、趣旨の大要というところへいきます。

「彼レノ考ヘ識見ヲ察知スルニタル大切ノ誌料ナル故趣旨ノ大要左ニ抜粹シテ見ン。原文ニハナイガ便宜上要項二分チ又原文モ意識シテ記スト 政治ノ大本（親政） 第一ニ朝憲ハ旧ニ復シ叡慮次第ニナサレ武臣ヨリ決テ奉緯間鋪ク政治は全テ奏聞之上詔旨ニヨリ行フコトトノベテアル」政治の大元は必ず天皇の詔旨を基にしてやろうということ、

次に下の段、

「学問 京地へ古道学ノ大学校建開江戸大小名城下へ古道学ノ学校ソレソレ造立スヘシ。西洋学ニ対シテハ諸蕃夷ノ異端学ヲモ学ビ国家ニ益有事ヲハ古道学ニ類属シテ採用スベシ」外国の学問も排除してはいけないということだと思います。

次の宗教もおもしろいです。

「將軍始大小名神祇ヲ尊敬シテ神社ノ祭儀古式ヲ以テナシ式内ハモチロン式外ノモノモ荒類ナキ様ニスヘキコト仏教ハ嚴禁シテ寺院ハ悉ク毀却シ僧ハ還俗セシメ銅仏等ハ宝錢大小銃ニ鑄替、木仏ハ焼捨、石仏ハ石垣等ニナシ寺院ノ材木ハ橋具等ニスベシ」徹底的に仏教は排除という考え方です。

こんなふうに片桐春一は考えていたものですが、岸野氏によると春一はそんなに急激な世直しを考えていたのではなくて、天皇一筋ではなくて將軍江戸幕府を認めた形での考えが出ているそうです。そんなに全部を否定して吉田松陰みたいではなくて、今ある江戸幕府を大事にしながら天下泰平というか、あまり戦乱の無い緩やかな改革をやっていこうというのが考えだったようです。

## 2、戊辰戦争と伊那谷

戊辰戦争の中の伊那谷へと移ります。慶応4年、明治元年ですが、色々な政治家の動きが激しいので、整理しながらみていきます。まずひとつは戊辰戦争があります。特に十五代将軍の慶喜は恭順の意を示して、お寺に籠って朝廷に刃向かいませんとする意を示すわけですが、幕府の幕臣のなかには明治政府に反抗する者もいるわけです。それを平定するというので京都から江戸に向って平定の軍が出て行くわけで最初の軍がこの伊那谷も通っていきます。

伊那谷へ最初来たのは町史によると高松実村の一行です。山吹の座光寺家は朝廷の軍隊ということで非常に大事にするわけですが、その後相楽総三の一行もこの伊那谷へ入って来ます。この相楽隊については、座光寺家はどうもちょっとおかしいんじゃないか、というのがもともとあったみたいで、一応、建前上は大事にして警備したりしているんですが、前の高松隊よりも歓待もしていないんです。相楽総三は、最初は薩摩の西郷隆盛あたりの命を受けて、朝廷の部隊として来るわけですが、途中から年貢を半分にするとか勝手なことを言って人を集めたり、山吹へ来て一緒に行く人には刀をやるとかお金をやるとか言って人を集めるので、山吹の座光寺家はそんなことを言われては困るということで抗議したりしているわけです。そういうなかでだんだん朝廷からは、この相楽総三の部隊はおかしいということで戻れと命令されますが、戻らずに言うことを聞かないので偽官軍ということで捕まって殺されてしまうわけです。

ここにあるのは本学神社の神主さんが明治4年に描いた絵ですが、殺された相楽の墓が今でも諏訪に有りますが、その墓を見ながら神職が描いたものです。

こんなふうにいる人達が伊那谷木曾谷を通過して江戸へ向かったりしていくわけです。戊辰戦争の絵がインターネットに有りました。京都で伏見の戦いがあります。そして将軍慶喜は大阪から船で江戸へ帰って恭順の意を示すということです。



京都から三つの方向に分かれて平定の軍が出て行きます。東海道を通過して江戸へ向う軍がひとつと、東山道を諏訪から分かれて甲州を経由して江戸へ向う軍がひとつと、碓氷峠を越えていくのが二つ目、三つ目は北陸道に行くのというように三方向に分かれて行きますが、ここで問題なのは東山道軍です。東山道軍がこの辺近くに来るのでそれに対して果してどう対応したらよいか、戦ったが良いか、それとも恭順の意を示して一緒に戦ったが良いか、ということを追られるわけです。

江戸城の明け渡しがあるわけですが、それに承服できない人達（彰義隊）が上野の山で戦いを始めるわけです。そして、この前大河ドラマでやりましたが、会津若松では白虎隊を含めて戦いがあったり、長岡でも戦いがあります。そして段々東北の方へ行って最後は函館五稜郭での戦い、こんな戊辰戦争が行われるわけです。

### 東山道の諸藩主に本陣への出頭を求める命令文

この中で東山道の道筋の諸藩主に本陣への出頭を求める命令文が片桐文書の中にあります。この資料館にありましたので出してきました。ここにありますように、「道筋の諸藩主は速やかに本陣にまかり出て恭順の意を示せ」という命令です。この東山道軍の総督は岩倉具視の次男の岩倉具定ですね。先程の相楽隊より後のほうで来てこの東山道軍は伊那谷へは入ってきません。木曾谷を通過して諏訪へ行きます。山吹の座光寺家はどうしたかということですが、あらかじめその前に岩倉具定の東山道軍のところへ行って是非参加させて欲しいと頼むわけです。そして参加してもよろしいということになりまして先鋒隊をつとめるわけです。これは山吹藩資料という本がありまして、ここに維新従軍生存の士とあります。これは、そのとき従軍した人達で生きている人が写真に写っているというわけです。この人がその当時、座光寺家の中心になった座光寺盈太郎です。まだ若い、1850年生まれですね、あと同じように参加した人達がいて、名前はここに書いてあるんですが分かる人がいればお知らせ下さい。この盈太郎の隣にいる人が片桐千里と書いてあります。



この人、千里は1849年生まれでこっちの人の方がかなり歳がいつているように見えるのでこれは片桐衛門、おじさんのほうではないかと。このとき大将で行った人かなとも思いますが、なんとも分かりません。こういうような人達が旗を後ろに立てて一緒に写真に写っています。この後ろの右から二人目は、中平福次さんの先祖で資料館二階に展示してある編み笠の人です。このように座光寺家の家中60人というふうに町史には載っています。でも報告書には50人と載っています。お付きの者もいるのでそこら辺は正確ではないと思います。

これは座光寺家13代の盈太郎の着用した鎧兜です。これを着て行って帰ってきて、山吹の泰山神社に奉納して今は泰山神社の社宝になっています。あとここに旗章があります。錦の御切れと書いてありますが、あのころは錦の御旗と

いわれますね、これは天皇の軍だぞということを見せるために錦の御旗を立てるわけですが、その時に目印として旗章を両肩へ付けて行ったんです。それが今の座光寺家に残っていて今回展示させてもらいました。

これは先ほど言った中平さんが参加した時の編み笠です。また、東山道先鋒嚮導隊へ従軍した時の報告本が、これで下書きだと思んですが、片桐家に残っていたのでそれを古文書の先生に読んでもらっていますので資料②として載せておきました。

### 東山道先鋒嚮導隊へ従軍した時の報告書 (右の写真)

座光寺隊は碓氷峠の方へ行くには行くんですが、土地に不案内で肝心の戦があった時に遅れてしまったんです。案内はしてもらったけど、それがうまくいなくて戦さに間に合わず、行ってみたら幕府軍の死体がいっぱい転がっていて、そこへ着いて残念だったというようなことが報告されています。最後には盈太郎が戦死したといわれたが元気ですよ、ということの報告の下書きです。こんなふうなことがあって座光寺家は家中あげて東山道軍に参加しています。このようなことが認められたのかわかりませんが、座光寺家の盈太郎さんは、この時の東山道軍に公家で澤という人がいるんですが、その公家の四女を奥さんに貰っています。その澤家の長女は岩倉具定の奥さんになりますので、岩倉具定と兄弟ということになります。特に座光寺家という名前が良かったのか知りませんが、行く所々で公家と間違えられて非常に大事にされたということも書いてあります。これが座光寺家が東山道へ参加した時の様子です。



### 戊辰戦争に関わったの平田国学者の活動

次に、他の平田国学者の活動ですが、北原稲雄という人が中津川へ東山道軍が来た時に中津川まで出て諏訪まで案内して、諏訪から北原稲雄は帰ってきます。松尾為誠、これは多勢子の三男ですが、この人はそのまま参加していきます。山吹の座光寺家だけではなく、平田の門人たちも一緒に東山道軍に参加しています。なかには東北の地奥羽の鎮撫副総督 澤 為量(ためかず)に従ったのが伴野村の松尾誠、これは多勢子の長男。それから座光寺村の稲雄の長男の信綱、この二人は東北地方の激しい戦いにも参加しています。それから平田篤胤の養子の鋳胤家が江戸で戦過に遭いそうで危ないということで鋳胤が江戸から京都へ避難する。そういう時にもこれを支援するため座光寺村の今村真幸、これは稲雄の弟ですが、中島範武と一緒にやって平田家の避難を手伝っている。こんなふうな活動を明治の最初にしているのです。

### 3、平田国学者たちの挫折

明治が始まって少し経った頃になりますと、平田門人は天皇を中心とした世の中になるのではないかと予想していたのですが、なかなかそうはいかなくて、二卿事件というのをきっかけにして平田門人たちは弾圧されます。これについての詳しいことはよくわかっていないんですが、二卿事件(外山・愛宕事件)は明治4年です。

公家の中にも攘夷派がいて、愛宕通旭と外山光輔が中心となって明治政府の転覆、クーデターを謀ります。その未遂事件がわかって339名の人達が逮捕されます。かなりの人達が逮捕され、安政の大獄以来のことだと思います。このことはあまりよくわかっていません。京都でのことです。このとき平田国学者や復古神道の関係者も本当は何もやっていないのに予防拘禁的に、「あいつら危ないから捕まえてしまえ」ということで捕らえられています。足利の將軍の木首を晒した角田忠行、それから先ほどの相楽の墓を一生懸命造った伊那県大参事の落合直亮、これは商人ですが松尾多勢子がお世話になり、飯田の白山神社とも関係する池村久兵衛も捕らえられています。こんなことをきっかけにして平田門人達は、最初は政府の中核に入っていけると思っていたんですが、挫折を味わうことになります。でもこのことはあまり載っていません。これは小学校の詳しい年表ですが、明治4年のところに二卿事件は出てきません。京都の資料館へ行って「こういう事件を知りませんか？」と訪ねましたが「知りません」ということであまり知られていない。平田門人にとっては大事なことなのですが、これが消されてしまったということではないかなと思います。

ではそういう世の中に対して北原稲雄はどう思っていたのだろうか、ということですが、まず、稲雄についてここに略年譜を載せました。北原稲雄という人は座光寺の阿島橋に向かう道がありますが下りていくと左側の家です。そこには北原斌男さんという方が居て、今回もこういう写真などを提供してくれています。稲雄は1825年に生まれます。有名なのは1864年、水戸浪士が来た時に飯田の町を戦過から守るということで皆で相談して間道を通させたという話です。このあと明治2年になると飯島に県庁ができて伊那県の役人になります。そして明治4年には筑摩県が出来ますので、今度は筑摩県の役人になります。そして松本へ移住しています。筑摩県が無くなったあとは役人をやめて松本開産社の社長になり、その後、座光寺へ帰ってきてきて病気になる、明治14年57歳で亡くなっています。こういう生涯です。亡くなった後に座光寺の弟子たちが碑を建てています。この北原家は、多勢子が松尾家に嫁ぐ前にここで勉強を

していた所です。この稲雄を含めて三人兄弟ですが、三人とも国学者です。国学3兄弟として有名なわけで、この稲雄は気性が荒いようです。この後出てくる今村豊三郎（今村真幸）と飯田の樋口家へ養子に行った樋口與平の三人は国学の3兄弟といわれる人達です。性格については家に泥棒が入った時にどうするかというと脅かして追い払うというのが稲雄で、豊三郎は泥棒を座らせて説得する、三番目の與平は泥棒が来たら真っ先に逃げる、そんな風にいられているようです。そんな三人の国学者がいる家の長男が稲雄です。

稲雄は明治7年に左院宛てに建白書をだしています。中山道資料館に資料がありました。宮地正人先生がそれについてまとめてありますので資料③を見てください。どういう内容かといいますと、平田門人ですから日本古来のものが廃れている、洋学の弊害が出ている、福澤諭吉みたいな者は追放して皆で一致して天皇中心の国家を創っていけ、とそういう建白をしています。当時の明治政府のやり方というのは西洋のものを取り入れなければいけないということで、稲雄の思う政治とは違った形の政治が行われていた。それに対する建白です。最初は自分達で世の中を創ると思って始まった明治ですが、僅かな間に全く違う方向へ進んでしまった、なんだこれは、ということを平田門人は怒ったようです。

#### 4、官吏として国づくりに参加した人たち

ちょっとここで話が少し変わりますが、平田門人の中ではこんな生き方もあります。官吏として国づくりに参加した人も結構いるわけですが④の資料を見てください。

##### 裁判官の道を選んだ今村<sup>のぶみち</sup>信行

今村信行（松太郎）は、平田門人です。本学神社を造った時も関係していますし、東山道軍にも参加しています。そういう今村信行の略年譜です。

天保11年に山吹村の今村文吾の長男として生まれます。面白いのは嘉永4年に弟と一緒に母方の静岡の家に預けられて勉強するという、母方ということ、この時代に遠江国から嫁って来た人がいるということ、この時代に山吹と静岡との交流があったということがわかります。そこで勉強して帰って来て、山吹でも国学やいろんな勉強をして水戸浪士の時にはその行動を偵察して正確に報告したので、山吹座光寺家の家中の信頼を得ます。

慶応元年、片桐春一らに国学を学び平田篤胤没後門人となります。26歳です。慶応4年甲州鎮撫高松隊に従って甲州まで行きます。高松実村の隊ですが、この隊は朝廷からは良く思われなかったので「帰りなさい」と言われ、その時捕まることはなかったのですが、高松実村は京都へ戻られます。その時今村は実村を送り届ける、そういう役目をしています。

明治2年には伊那県の役人に採り立てられますが、今村は行きません。多くの人達が役人になりますが、今村は私は自分の道を行きますということで、辞退して横浜へ行き、西洋事情を学びます。一旦帰って来て、その後東京へ戻り、法律の勉強を続け、司法省へ出仕します。明治14年に東京上等裁判所へ勤め、適正な判決で名判官の名を欲しいままにします。そして明治22年には我が国初の民事訴訟法の法案を起草します。50歳のことです。明治27年には大審院判事になります。55歳です。しばらく経った明治39年の時、新嘗祭で宮中に参拝しての帰り、馬車が転覆して負傷します。この負傷が元で70歳の生涯を閉じるわけですが、この時も大審院の判事のままで。

こんなふうには他の人とは違って、江戸へ出て自分の思った勉強の道をあくまでも追求した、そういう人もいます。この今村信行については高森から出た人、ぜひ知って欲しいということで『高森の人』という本がつくられています。その本の中にあつた資料をちょっと紹介しておきます。今村信行が片桐家の春一の跡取りである片桐千里に当てた手紙です。旧主家の座光寺家は領地を返して農民になっていますが、生活はなかなか苦しくて、幕末から明治にかけて五千両位使ったといいますから非常に生活が苦しかったのではないかということです。「今月分別紙郵便為替で送ります」と書いてありますから、毎月五円を座光寺家へ送っていたということです。こんな一面もある今村信行も座光寺家の家中の平田没後門人でした。

##### 山吹村の中で活動した片桐千里

今述べて来た中で、時々、片桐千里という人が出てきますが、この人は地元で活躍した人です。外で何かをしたとかそういうことではないんですが、村の中では非常に重要な役割を果たした人になります。次は山吹村の中で活躍した片桐千里です。

この系図でみると春一の息子ですが長男ではありません。次男です。長男は明治になってすぐ亡くなってしまいます。八百という人が千里の奥さんになります。千里は昔はよくあつた弟なおしで、兄の奥さんを貰って後を継いだということです。この文書は、よくいられている学校統合問題についての有名な文章ですが、座光寺家の陣屋の所ですので山吹では南の方になります。今、学校は北の方ですが、南と北で統合問題で揉めるわけです。ただ言い争うだけでなく、警察沙汰になって怪我人が出たと、かなり激しい統合問題が起きています。千里はここで何を言っているかということ、「も

う学校問題はこりごり、まっぴらごめんこうむる」というようなことを言っています。こんな本音を言えるのは珍しい人です。この人は村長になりますが、なって2年目位で「私はそんな器ではないので辞めさせて欲しい」という辞職願が残っています。でも辞めさせてもらえなくてその後も続けたようです。次に皆さんにも是非考えてもらいたいのですが、この写真の人物が片桐春一か息子の千里かよくわかりません。刀を持った芸者が写っています。この人物について下伊那史第7巻をつくった宮下操先生は、幕末に横浜あたりで片桐春一が47・8歳の頃撮った写真ではないかといいますが、確証がないのでなんともわかりません。この頭の様子とか、格好とかから判断して、明治になる前に亡くなった春一か、それとも明治の後になって後を継いだ千里かどちらかだと思うのですが、今もって資料館でも判断が付きません。2階に展示もしてありますので情報があったら教えてください。



### 岐阜県、長野県の土木課に勤めた今村真幸

その他に、先ほどの今村豊三郎（真幸）ですが、この人は岐阜県や長野県の土木課に勤めます。この人は土木関係に強い人で、飯田にめがね橋（長姫橋）という所がありますが、あそこの設計はこの人がやっています。土木関係で活躍して今村家へ戻ってくる、こういう人です。また、松尾多勢子と一緒に江戸へ行って司法省に出仕する松尾千振、多勢子の孫です。この人は出仕するんですがすぐ帰ってきてしまいます。何故帰ってきたかという、それはわかりません。

### 伊那県、筑摩県に勤めた後、松本の開産社の社長となった北原稲雄

北原稲雄という人は松本で開産社というところの社長になるわけです。この開産社については山吹にも作られています。山吹の文書にも資料があります。（資料⑤）開産社についてはこの後出てくるので飛ばします。

## 5、地租改正運動と自由民権運動

いよいよ時代は先に進みます。平田国学を学んだ門人たちの思い通りには世の中はいかなかったんですが、特に問題となったのは地租の改正です。

筑摩県の伊那郡では地租が非常に不平等だったといわれています。どういうことかといいますと、筑摩県は伊那郡に最初は割引方を設定して、籾殻とか種籾とか肥料とか手間代の割引率を一等の田んぼは3割、二等の田んぼは何割と段々割引いっていきまして、畑は4割から6割にしていく、明治7年に内示され、これは良いと思ってやったところは、県庁官吏指示で畔、冷溝、畑の石塚まで組み込んでやったわけですが、明治8年になったとたん大蔵省が一律割引で田は1割5分だと、非常に割引率を悪くさせるわけです。前の物を破棄して1割5分で割り引けということで増税になるわけです。これはかなわんということで、下伊那の衆は信夫村の森多平を中心にして市田村の関川、里見村宮下楠実、上郷村の今村真幸も関わって地租税軽減運動を始めるわけです。明治13年にはその嘆願が認められていくわけですが、その間地道な活動を続けます。

### 松沢求策と奨匡社

松本に松沢求策という人がいまして、奨匡社が明治13年に出来ませんが、国会開設を求める政治結社です。この中に下伊那からは39名参加しているんです。何故かあの平田門人が多く居た里美村は15名参加しています。つまりそれだけ政治意識は高かったということだと思います。

### 開産社をめぐる北原稲雄と松沢求策の論争

一方、松沢求策と同じ松本にいた北原稲雄は非常に対立するわけです。松沢の主張はどういうことかという、「貧民も加わって皆でお金を出して開産社を作ったのに開産社は士族にのみ手厚くしておかしいじゃないか」というのが松沢の主張です。

北原稲雄は「士族が非常に困っているからそれを助けなければいけない」ということを主張して言い争いになります。稲雄という人は民権派をひどく嫌ったということで、地租改正運動の時も民権派とうまくいなくなってしまいます。

### 深山自由新聞の発行と愛国正理社

下伊那の方では、さきほどの森多平という地租改正運動で中心となった人が、自由民権運動を広めるために深山自由新聞というのを作ります。深山自由新聞の株主を見ると、平田門人の人が参加しています。この株主ですが名簿がありまして山吹村では9人参加しています。地主の人達が株主となって参加しています。（資料⑦）

森多平は一生懸命こういう人達を集めて新聞を発行するわけですが、だんだん森多平の思いとは違うようになってきて、森は身を引きます

一方、飯田には深山自由新聞のほか愛国正理社というのがあります。これは先程の地主層ではなくて深山自由新聞主幹の坂田という人が飯田へ来て写真業を営む傍ら、政談演説会で貧農、小作人、元結職人、小商人、細民に人間が生

まれながら持っている権利を説いて啓発していた。桜井平吉という人がわらじ履きで村々を回り、伊那谷は周囲を山で囲まれて交通が不便だけに教育が行き届かない、学問をする機会に恵まれない人達の為に政治、経済、普通学を教える農民塾を開き、農事相談に応じる、山村から飯田町に所用に来る者に事務所を開放し、米や野菜を持参すれば無料で宿泊できる、十銭、二十銭の零細な借金でも裁判に持ち込まれて金貸しに苦しめられている者に対し代言・代書を引き受け謝礼を取らない、こんなふうに住生活に困っている人達を集めて愛国正理社というのをつくります。一時は2千人位参加します。この愛国正理社は飯田事件に関わって潰されるわけです。この愛国正理社については、地主層は反発して入っていきません。このように階層で分かれています。

## 6、大日本実行会の成立と社会変革運動

いよいよ時代が進んでいきますが、ここで地主層の運動でどういうものがあつたかということで、大きな動きとしては大日本実行会の設立があつたと思います。どういうものかといいますと、最初は平田国学者も関係するわけですが、不二道という富士信仰を中心とした富士講の一派です。飯田の池田町に松下千代という人がいて、その人が積極的に広めます。不二道が活発となってだんだん明治政府の神道国教化政策に合わせて神道としての形式を整え、生活の中での道徳実践や社会事業を重視します。どういうことかといいますと、富士信仰の修験者みたいな、そして何か祈れば奇跡が起こるといふのを排除して生活での道徳実践や社会事業、そういうものを中心とした神道実行教というものに変わっていきます。最後にはこの人達は宗教的なものをすべて捨てて大日本実行会というものを設立します。これは教育への接近をして、宗教ではなくて教育勸語が一番である、教育勸語をまず実践すればよいという形にかわっていきます。その大日本実行会には地主層の人達が大勢入っていきます。ここに入っていた人達の名簿があります。(資料⑧)

大日本実行会下伊那支部を明治35年に全国に先がけてつくって広めていきます。中心になつたのが阿智の原九右衛門、副長に木下與八郎、そして北原阿智之助、先程の北原稲雄の息子になります。そして座光寺盈太郎の名前があります。こうした豪農層を中心としたメンバーで大日本実行会というのができます。その活動のスタイルは何かといいますと宗教を排除しているので道徳実践というか、倫理を中心に説いているわけです。

### 伴野堤防づくりに情熱を傾けた松尾千振

世のため人のためということ、そのなかで先程出てきた松尾千振という多勢子の孫ですが、司法省へ出仕して直ぐ帰って来て伴野の地で県会議員になつたりします。何を中心にやつたかといいますと、この伴野の地に田んぼをもっと広げたい、市田村の惣兵衛堤防の所で跳ね返された水が伴野の地へどんどん来るんですが、これをなんとかまた跳ね返して伴野の地へ堤防を造りたいということで一所懸命やります。最初は造つただけでも流されてしまつたりして伴野の人達に見放されます。しかし一人でも私財を投げ打つてもやるということで、やっている途中に完成を見ないうちにこの人は亡くなってしまいます。多勢子が生きていたうちに孫が亡くなつてしまうということで多勢子は悲しんだようですが、このような碑が伴野にあります。大日本実行会の人達は水路を造つたりして土木事業に非常に熱心に取り組んだりしました。



### 今村真幸の晩年の思想

もう一人、今村真幸ですが77歳で亡くなるその晩年ですが、今宮半平の所の細い道を入つて行くと細長い石碑があります。これは水戸浪士の顕彰碑ですが、これは今村が一人で始めて、そのうちに全国を回つてお金を作つてこんな細長い顕彰碑を建てます。それと共に細民救済の建白書を作つたり、日本社会党へ入党します。昭和39年のことですが、今村の生き方は、今までの豪農層とは違う生き方をしていると思います。細民救済建白書の全文が有りましたので見てください(資料⑨) 細民救済建白書における八つの具体策ということで全文は2階に展示してあります。ひとつめの、小作層による五人組を組織し、その総代へ選挙権を与えるということ、明治の30年代のことですので非常に先進的かと思つています。そして困っている人を調査せよと、その中で最も赤貧者、本当に困っている人達を調査せよと。そのころ徴兵制がとられていたので服役中の兵士の家族をなんとか救えよと、日露戦争が終つていまして、その戦争で亡くなつた人もいます。その遺族を救済せよ、というような具体策を出しています。この人は日本社会党へ入つたことから分かるように、同じ豪農の実行会の人達とは違う生き方をしています。これは水戸浪士の碑を建てたと同じ目線で見ることができた思想であつたのかと思つられます。77歳で亡くなりますが、私はこの今村真幸が一番平田門人として、また本学神社を造つた人たちのなかで、最後まで思いを遂げた人ではないかなあと思つています。

## 7、本学神社の再建

本学神社ですが、どうなったかという、雨ざらしですので五十年経つとこんなふうになります。屋根が朽ち落ちてしまっています。

これは昭和2年の時に集まった人達です。そして本学神社再建の願い書が出ています。大正6年に出ていますが、五十年経つてこういう様子なので忠君愛国の思想の啓発のためにも大事なことだと呼び掛けています。そして呼び掛けた後ですが、昭和3年に今の本学神社が出来ます。(資料⑩)

### 昭和5年徳富蘇嶺夫妻が本学神社参拝

昭和5年9月14日、徳富蘇峰夫妻が本学神社に参拝しています。徳富は前日飯田で講演を行い、翌日山吹へ来ています。当時徳富蘇峰は右翼運動の中心人物でしたので是非その人に参拝してもらいたいということでした。山吹の若い衆が籠に乗せて山の上まで行き参拝し、山吹の衆が大勢集まって写真を撮っています。この後、すぐ雨が降ってきてしまい、皆でお菓子を食べた後、上片桐の駅から帰って行くと、森本州平日記には書かれています。こんなふうにして本学神社の再建がなされます。



山吹  
徳富久

### まとめにかえて

時間が来ましたのでまとめに入りたいと思います。

- ・平田国学者が思い描いていた世の中とはならなかったということですが、この時代、世の中が激しく動いたというのは確かかなと思います。政権が変わったからといって生活が変わったということではないと思いますが、朝の連続テレビ小説もちょうど今ここですね。何も変わらなかったということではないですが、平田門人達が考えていたような世の中には変わらなかったということです。
- ・世直しの思想を持って明治の時代を迎えた人達は、それぞれ自分の持ち場があると思いますが、自分の持ち場で周りの人達のために精一杯生きたんではないかと。自分の事で精一杯という人が多い中で、平田門人の人達は自分の事だけでなく、周りの事を考えながら生きた。いろんな道はあると思いますがそういう道で生きたと思います。
- ・この登場した人達は上層に位置する人達で、ネットワークで繋がっています。思想というよりはネットワークの繋がりでそういう方向へ行ったかと思います。ところでこの中で先程出てきましたが、生活に非常に困っている人達、地租改正といえどもあれは地主の問題で下層の問題ではない、下の人達はどうかとらえていたのか、どう困っていたのかは今一つ明らかに出来ませんでした。
- ・「不二教から大日本実行会へ」の動きに示されているように、非合理な世界、不合理な世界からより合理性をもった世界へというようなことを求めて世直しが展開されてきたと思います。平田国学もそんなに不合理ではない。一見、神様の問題になるようですが、結構合理性を持っているように思います。伊那谷はそんな伝統があつていわゆる合理性を持った世の中に少しでも近づけていきたいという思いが皆にあつて、そういう中での世直しの運動ではなかったかということをおっしゃるわけですね。

ご清聴 ありがとうございます。